



Title	私の農村社会学の摇篮期
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	各務時報
Issue Date	1939-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77291
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part56.pdf



創立二十五周年紀念
高等農學研究所（昭和十四年）

私の農村社會學の搖籃期

鈴木榮太郎

此夏休みの間に可成に頑張つてとうとう、「日本農村社會學原論」の未完の章を全部一通り書き上げる事が出来た。數年來少しづつ筆を運んで各章を埋めて來たのであるが、仲々はかばかしく進捗せず、今から顧みて見ると一章を完成するのに一年を要した章もある。勿論私は此「原論」にのみ没頭して居た譯ではなく、興味に誘はれて色々の部分的な問題にも次から次に誘導されて來たものでは有るが、然し部分的な問題と云つても大体農村社會學の領域外のものではなかつた。屋敷神や座頭の研究の如きは、それも日本の農村の生活を凝視すれば當然現はれてくるものであるが、「原論」の完成に従事してから私には餘りに部分的な問題であつた。凝視は私の癖で、凝視して居ると農村社會學も、いや科學的研究と云ふ事さへも、忘れてしまうのである。然し兎に角原論の各章に全部一通り筆をおろしたと云ふ事は私として大きな喜びである。けれども文字通り筆をおろしたと云ふ事で、これを印刷に付する迄には尙ほ二三ヶ月の推敲を要するであらう。

ある人のロンドンの調査報告は十年の歲月を要したので調査の初期と末期とでは調査の客體そのものが著しく變化し、出來上つた報告は甚だ不揃ひのものにならざるを得なかつたのである。調査の精密度及び規模には自から限度がなければならぬと云ふ事を教へるよい實例とされて居る。又私が高等學校時代によく遊びに行つた洋畫家の山本森之助氏から次の様な話

を聞いた事がある。それは千萬長者の岩崎家から依頼されて信州の山を描きに行つた時の事であるが、山の中に小屋を建ててそこで一ヶ月半ばかり一枚の繪の完成に没頭したのである。ところが一ヶ月半ばかりの内に草木の色も形も又空の色も随分變つて行つたので自分が最初考へて居た繪とは異つた繪が出来上つたと云ふのである。

調査したり描いたりする客體そのものは、一瞬も停止する事なく活動し變化して居る。活動し變化して居るものを固定した姿で現はさうとするところに無理がある。それも觀察の客體が小ぢんまりした一目で全面に目にとどく位の範圍のものならばまだしもであるが、視野が一目で利かない様なものになると、一方を見て居る間に他方は遠慮なく變つて行く。

日本の農村は今急激な都市化の嵐の中に在る。其社會生活の各方面に於いて、事情は年々月々いや刻々に變つて居る様である。日本農村社會學は日本の農村に於ける社會生活の基礎的な構造形式の認識を企圖して居るものではあるが、社會生活の基礎的な構造は具体的には政治や經濟や宗教や教育や藝術等、生活のあらゆる側面を含んで居るのである。此等の具体的なものを通して見なければ社會の構造形成は分らないのである。直感や論理の飛躍に依るのではなく、思惟の起点を日本農村に於ける具体的事實の上に置き無理のない論理を構成し行く可きとある日本農村社會學の視野はそんな譯であるから随分廣いのである。而かも其具体的事實の科學的處理は、どの一つの方に於いても少々でない努力を必要として居る。特に其大部分が科學的に未踏の領域であるからである。具体的事實を科學的に拾ひ上げる事に第一の苦心があると共に、拾ひ上げたる事實を科學的に處理する爲に全く新らたなる方法を立案することが必要である。そんな譯であるから部分的な問題に随分多くの時間を要し、そこに暫く思索を沈潜せしむる事がどうしても必要である。凝視は私の癖であると云つたが、これはまんざら癖ばかりからでもない様である。然し兎に角凝視して居る間に他の部分は遠慮なく變つて行く。日本農村の歴史發展の或る一時期に於ける全局的横斷面を見る事はとても出来ない談である。そんな譯であるから私が「原理」の輪廓を作つたと云つてもそこに色々の不満足な点が存するのは當然である。然し兎に角それが曲りなりにも大体の目鼻がついた事は自分自身に於いて大きな感激である。假令其が客現的に如何に評價されやうとも。

氏から同書を借りて讀んだのである。當時留學から歸つて來たばかりの同氏は、合衆國に於いて農業經濟學と農村社會學が提携して居る事情を色々活して居られた。高農に於ける同僚中學間的に一番近縁と云ふ意味からでも同氏には親しみを感じて居た。同氏の地制制度の研究には私自身も興味を覺へて居た。同氏が間もなく台灣大學に轉任された後には農業經濟學の教授としては、今鳥取高農の校長である岡村精次氏が來られた。岡村氏が來られた頃には私も農村社會學に相當に關心を深めて居た。同氏の農業經濟の專政生に毎週二時間農村社會學史を講義出來る程度までになつて居た。そして其講筵の一隅に岡村氏は研究の結果を矢張り早やに各務研究報告に發表されたが、其何れの研究にも私自身も興味を持ち、犬馬の勞をとつた事もある。此の最も大規模の研究は輪中に關するものであるが、此研究は遂に未完成の儘で督學官となつて文部省に行かれた。其時の轉任の電報は私と二人で長良川上流の最奥の部落で農村調査をして居る時受取られた。私等は其部落の寺に泊つて居たのであるが、其日の晚餐には此の榮轉を祝する意味で酒を置いておそくまで話した。

岡村氏が岐阜を去られし頃迄は、私は農村社會學に熱中にして居たけれど、其に半生の精魂を打ち込まうなどとは思つて居なかつた。然し其後幾年か過ぎた今日私は日本農村社會學の完成の爲には一生を捧げてでも尙ほ足りない様に思つて居る。